

# 基本形容詞のプロトタイプ構造

川 出 才 紀

## はじめに

言葉を使う主体としての人間と言葉の意味との関係を探る可能性として Rosch (1973,1978) はプロトタイプ理論を提唱した。プロトタイプ理論では、あるカテゴリーの成員はその典型性においてバラつきがあり、人はそのカテゴリーの成員の典型的な例 (exemplar) に関するイメージ (idea) を持っており、これをプロトタイプと呼ぶ。こまどりやスズメはペンギンより典型的な鳥であり、椅子が家具の典型例、プロトタイプ的な成員であるという。Pulman (1983) は、このプロトタイプ効果を動詞にも広げ、murder が殺し (killing) の中で、execute や suicide よりも典型的、stare が peer や squint よりも典型的とみなされると言う。プロトタイプを認知言語学の枠内で練り上げているのは Lakoff (1987) であり、プロトタイプの理論的可能性を強調している。

この研究では基本形容詞に照準をあわせ、そのプロトタイプ構造を探る。ここで言うプロトタイプとは、Rosch (1973) に習い、自由連想による連想の強度をその指標 (尺度) とする。この調査にあたり、基本形容詞として「大きい」「小さい」「高い」「低い」「長い」「短い」「太い」「細い」「広い」「狭い」「厚い」「薄い」「重い」「軽い」を選定し、刺激語として用いた。データ収集は信州大学の一年生434名と二年生127名を対象に行なわれた。専攻分野は様々である。データの信頼度を高める工夫として、一度に収集するデータは3種類以内とし、一項目につき50名前後を充てた。

この研究のねらいは、基本形容詞のプロトタイプの構造を見ることであるが、データ整理の過程で、次の3つの、より一般的な問題が浮上してきた。それは、1) 形容詞表現において、どうして大きい/小さい、長い/短いのような対構造 (= 構造の対称性) を見せるのか、人は常に二元論 (対関係) でもの事をとらえるのか、2) 基本形容詞の概念形成の中心 (核) になるのは、どういう名詞概念であろうか、(またそれは何故か)、3) 抽象概念を語るのに、人はどのような概念 (認識) 操作 (cognitive operation) を行なっていると考えられるだろうか、の3つである。これらはすべて非常に複雑な問題であり、ここでの考察の範囲を越えるが、しかしそれでもプロトタイプ議論においては避けて通ることのできないものである。以下では、データを参考にしながら、その周辺を見ていきたい。

## 1. 形容詞表現の対構造

本調査の対象となった形容詞は、上でもふれたように、すべて対 (pair) の関係を示している。

大きい ↔ 小さい    高い ↔ 低い    長い ↔ 短い  
太い ↔ 細い      広い ↔ 狭い    厚い ↔ 薄い

これらの形容詞に関して、国広（1982：169）は徹底的な構造分析を行ない、以下のような正六面体の関係でとらえ、定義を行なっている。

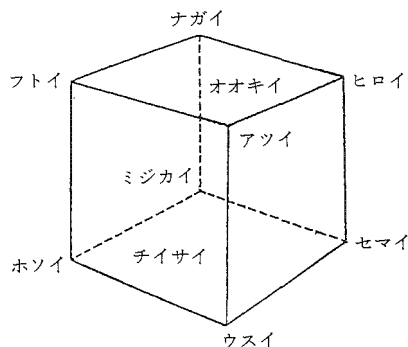


図 1

#### 定義

オオキイ（チイサイ）：〈形のある物を全体として捉えた時の空間占有量が大きい（小さい）〉

タカイ（ヒクイ）：〈水平面を基準とし、それと注意の焦点との垂直方向の距りが標準値よりも大きい（小さい）〉

ナガイ（ミジカイ）：〈線的な広がり標準値より大きい（小さい）〉

フトイ（ホソイ）：〈多少とも円形の断面を持ち、中心線が通っているように見える立体物の直径が標準値より大きい（小さい）〉ただし〈長さは直径より大きい〉

ヒロイ（セマイ）：〈厚さを考慮に入れないで見たときの物の面積が大きい（小さい）〉

アツイ（ウスイ）：〈‘A>B>C’ という長さの関係にある立方体において、ほかに限定的な条件がない時、Cの値が標準値より大きい（小さい）〉

上記の基本形容詞の図と定義を見ると、構造的にきれいな対関係をなしている。もちろん、これは言語分析の結果得られたものであるが、ここで問題となるのが「形容詞表現において、どうして大きい／小さい、長い／短いのような対構造を見せるのか」「人は常に一元論（対関係）でもの事をとらえるのだろうか」などであろう。

私たちは、言語活動を通じて、混沌の世界を不連続化し、分節化する（丸山1981）。コトバによって、事物や概念の対立関係、差異化が強調され、その結果、世界は「水」か或いは「否—水」か、「大きい」のか或いは「否—大きい」のかという区分がなされることになる。人は、「大きい」「小さい」などのコトバで世界を分節化する幾多の過程（繰り返し）を経て、次にその「大きい」「小さい」の概念を抽象する。そして、その結果、市川（1984）も指摘するように、大きさに関しては、大きいか小さいか、重さに関しては、重いか軽いかという無数の対を産み出す二分法（dichotomy）で識別する能力を身につけるのである。やがて、人は、事物そのものが「水」であるとか「大きい」などの性質を持っており、それが実体と

しての単位であるかのようにみなしてしまう。

Lakoff (1987: 126) によると、見ることは典型的に分節化を含む (SEEING TYPICALLY INVOLVES CATEGORIZING) という。つまり、木を見ることは、見たものを木として分類上位置づけることである。そして、人は分節化 (=記号化) の頂点にカテゴリーの中心値としての典型を見、それをカテゴリー「らしさ」として頭の中にイメージしているのである (田中1992)。言い替えると、「カップ」「皿」というコトバによって、「カップ」対「否ーカップ」, 「皿」対「否ー皿」の対立関係ができ、それぞれのゲシュタルトの中心に「カップ」らしさ, 「皿」らしさのイメージをプロトタイプとしてもつことになる。それ故、高さより、幅の方が大きいカップなど「らしさ」の中心をはずれたものは、カテゴリー上に位置づける苦労が生ずるようである。Labov (1973) の調査でも「カップ」「皿」「花瓶」の典型例は容易にラベル付けがなされたが、中間的な例ではラベル付けは容易ではなく、曖昧であった。世界は、コトバの網によって分節され、対立関係が生じるが、実際は連続体なのである。だから、カップと皿の中間に「皿カップ」(中間種) のようなコトバを用意してやれば、それが典型的プロトタイプとなる可能性もあるのである。

本研究で得られたデータによると、「大きい」「小さい」という形容詞に関しては、自分の身体を基準にして大小を判断しているらしいことが伺える (この点に関しては後述する)。たとえば「みかん」というカテゴリー内で比較を行なって、「大きいみかん」などと相対的な大小関係をいうが、データでは特に自分の身体と比べて大きいもの (山, 川, 海, 建物), 小さいもの (子供, 鉛筆, けしごむ, 花, 虫, 手袋, 鳥) は識別が比較的簡単らしく、頻出する。その中間物である犬, 机, 椅子は、上に比べて分類が困難らしく、「大きい」「小さい」のどちらにも出現する。また、大きいもの (山, 川, 海, 建物), 小さいもの (子供, 鉛筆, けしごむ, 花, 虫, 手袋, 鳥) 自身に「大きい」「小さい」の要素がそなわっていると考えるらしいということが、これらのデータの多さから伺える。実際には、たとえば象にもともと「大きい」という要素がそなわっているのではなく、象もマンモスと比べれば「小さい」のであるが。

さて、基本形容詞表現では、形の上でも意味の上でもきれいな対関係をなしているらしいことがわかったが、このような対の関係は概念上 (meta level) の関係であり、実際の運用では形容詞は独自の意味的展開を示している。つまり、対の形容詞間の共通性 (同様の名詞概念) とそれぞれに独自の名詞概念が見られるのである。ここで、独自のものを以下に挙げてみる。たとえば高い/低い の例で特に建造物について見てみると、「高い」は「ビル, 塔」と、「低い」は「建物」と結びつき易い。(なお以下に挙げた数字は、明記されたもの以外は頻度をあらわすものである。)

	ビル	塔	建物
高い	56.7	16.7	5.0
低い	15.9	7.9	14.3

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100  
ここでは結びつきの強さを表しており、「低い塔」と言わないわけではない。

また、「レベル, 点, 点数, 学力, 知能」は、「高い」よりも「低い」と結びつき易い。

	レベル	点	点数	学力	知能
低い	19.0	6.3	11.1	9.5	9.5
高い	3.3	0	0	1.7	1.7

注：数字は頻度をあらわす。  
単位：回/100

その他毛髪に関して見てみると、「髪」は「長い」とも「短い」とも同様に言い、「細く」、「薄い」のが特徴であるが、「毛」は「短い」との結びつきが顕著である。

	髪	毛
長い	38.7	1.6
短い	38.2	18.2
太い	1.8	3.6
細い	25.9	5.2
薄い	34.1	4.9

注：数字は頻度をあらわす。  
単位：回/100

また、「人生」は「長く」、「命」は「短い」というパターンも明確な対比を示している。

	人生	命
長い	22.5	1.6
短い	7.3	14.5

注：数字は頻度をあらわす。  
単位：回/100

その他の例としては、次のようなものがある。

	テレビ
大きい	11.5
小さい	6.8

注：数字は頻度をあらわす。  
単位：回/100

	大根	丸太
太い	18.2	10.9
細い	3.4	0

注：数字は頻度をあらわす。  
単位：回/100

これらは個人の目を通して対象がどのように見られているかを示す素朴な心理学的傾向にすぎないが、対象の特徴抽出により顕現特性が見いだされ、それによりプロトタイプが形成されるのであろうという推測ができる。例えば「ビルや塔が高く」、「髪は細く」、「毛は短く」、「大根、丸太は太く」、「休みは短い」といった具合にである。

これらには個人が日常経験し、見聞する歌や流行の影響も含まれ、それがやがて、個人レベルでのプロトタイプとなる可能性もある。

例：「大きいテレビ (11.5)」「小さい秋 (15.3)」「強い女 (18.5)」

(参考：「強い男 (26.2)」「弱い女 (2.6)」「弱い男 (5.3)」「弱い子ども (15.8)」)

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100

興味深いのは、同様のものでも、語によって、正反対のものとの結びつきが強くなることである。先ほどの例では、「長い人生 (22.6)」、「短い命 (14.5)」が挙げられる。ちなみに数

値的に比較すると、「短い人生」は7.3、「長い命」は1.6である。他には、「強い精神 (21.5)」、「弱い精神 (2.6)」がある。ところが「強い心」「弱い心」はそれぞれ36.9, 42.1であり差がない。(これらのプロトタイプに関しては後述する。)

こうしてみると、言葉は世界を分節する(言分け)が、ある語とある語の結びつきに強弱があらわれ、実際の運用においては、きれいな対関係が見られるとは限らないようである。なお、これらは特に文化の影響を受け易いところでもあり、異文化における研究も今後の課題である。

## 2. 基本形容詞の概念形成

次に基本形容詞の概念形成について見ていこう。基本形容詞の概念形成の中心(核)になるのは、どのような名詞概念であろうか、またそれは何故か、という問題について考えてみたい。

実験では、被験者に形容詞を示し、思いつくものを自由に書かせたが、その結果、具象名詞が圧倒的であった。以下に、形容詞3項目以上かつ各項目に10回以上出現した具象名詞を挙げてみる。

人, 体, 心, 頭, 髪, 顔, 目, 鼻, 手, 足, 指, 腕, 首, 声  
鉛筆, ペン, 糸, ひも, 棒, 車, 机, 椅子, 靴, 鞆, 服, 本, 石, 物, 犬  
部屋, 家, 学校, 建物, ビル, 道  
川, 空, 海, 山, 本

これらの具象名詞は、「人の身体部位」に関するものを中心に、それを取り巻く身のまわり品、環境(人工及び自然)に関する、Lakoff (1987) のいう basic level 語から成っていることがわかる。

以下に全データ中の、身体部位に関するものだけを、形容詞項目別に取り出してみた。

長い 32.6%	高い 13.5%	太い 47.8%	広い 15.2%
短い 38.2%	低い 23.6%	細い 43.1%	狭い 10.0%
重い 20.2%	厚い 13.7%	強い 27.0%	大きい 36.8%
軽い 17.5%	薄い 17.2%	弱い 29.3%	小さい 30.8%

これらを見るとわかるように、特に長い/短い, 太い/細い, 大きい/小さい, 強い/弱いでは、それぞれの素データの約3分の1が身体部位に関するものとなっており、これら基本形容詞(概念)の理解が基本的に身体を通して行なわれていることが推測される(この点については Johnson [1987] も参照)。人は身体を抜きにしては、世界とかわることができない。また身体を抜きにしては世界について語るができない。身体をもった人間を、生活に密着した身のまわり品、見慣れた環境(人工及び自然)が取り巻いている図式が浮かび上がってくる(図2)。

身体部位の他にも、「狭い(自分の)部屋」「強いにおい」「狭い駐車場」「弱い今年の巨

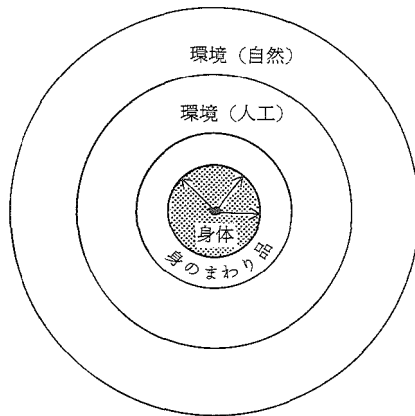


図 2

人」など，自身の目を通して把握されている事柄，個人の身体的経験と伺える事柄が頻繁に出現するのも確かである。例をいくつか挙げておく。

小さい部屋	13.6	軽い服	17.5	軽い心	13.8	重い気持ち	17.2	重い荷物	32.8
大きい部屋	4.9	重い服	1.7	重い心	9.5	軽い気持ち	15.9	軽い荷物	27.0

広い部屋	64.4	広い家	28.8	厚いパン	13.2	薄い味	14.6	高い服	26.7
狭い部屋	90.0	狭い家	30.0	薄いパン	4.9				

注：数字は頻度をあらわす。  
単位：回/100

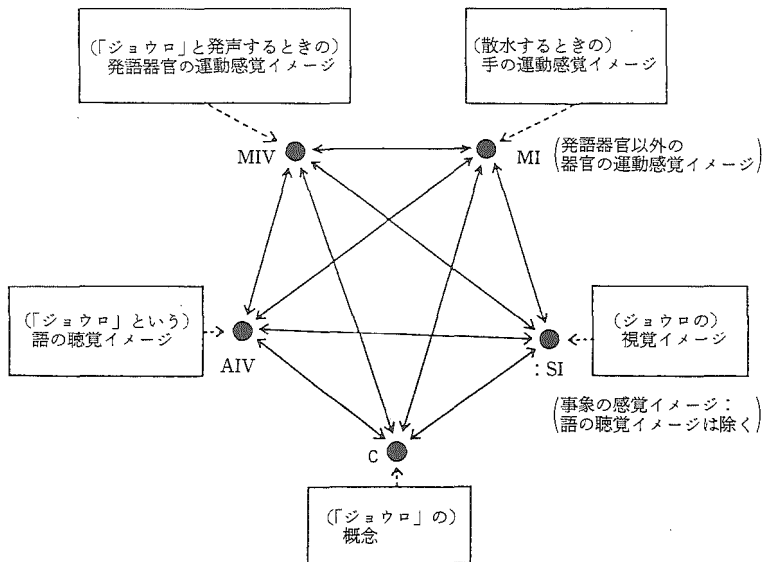
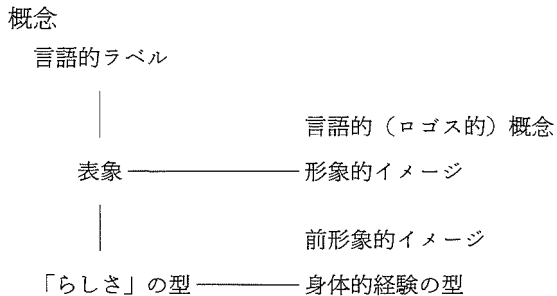


図 3

データを通して見ると身体と言語発達の関係が強いという仮説に私たちを導く。実際概念形成にかかわる身体経験の重要性を説いている研究者は、Clark (1973)をはじめ多い。発達障害や脳損傷の治療・症例から導かれた守屋 (1982:114) の概念図 (ペンタモデル) (図3) では、概念には、視覚イメージ、コトバの聴覚イメージに加え、発語器官の運動感覚イメージ、身体の運動感覚イメージが関与していることを「ジョウロ」を例に取って説明し、基本概念形成には、身体活動をベースにしたイメージが伴うことを主張している。

また、尼ヶ崎 (1990:153) は、個人が習得してゆく概念の原初が身体経験の型であるとして、以下のような図式で概念形成の過程を捉えている。



Johnson, M. (1987:274) は、「理解が……世界における人間のあり方或いは人間が世界をわがものとする仕方」であるとし、抽象概念の操作 (この点に関しては問3で述べる) も身体的経験がその基盤となっており、人間が身体をそなえていることの重要性を、やはり指摘している。

本研究でも、身体部位を基盤とする大小、長短などの概念把握及び、外界物との比較行為がなされ、概念理解における身体経験の重要性が示唆された。このように、基本形容詞の概念形成の核となるのは、人の身体部位を中心とする名詞概念であり、それに伴う身体的経験が認知活動に大きく関わっていることが伺えた。この点に関し、更に「抽象概念を語るのに、人はどのような概念 (認識) 操作 (cognitive operation) を行なっていると考えられるだろうか」という問題について考えてみたい。

### 3. 抽象概念

データでは、「高い」と結びつく名詞概念には、「山、ビル、木、背」の他に「服、値段」がみられる。これは、「高さ」概念が価格体系にまで持ち込まれた例である。Lakoff (1987), Johnson (1987) はこれを MORE IS UP の関係としてとらえ、我々の経験基盤を媒介としたメタファーとして説明している。

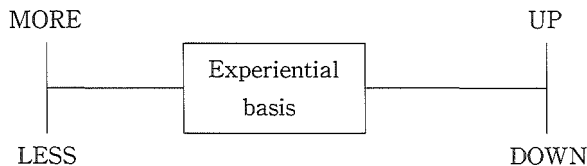
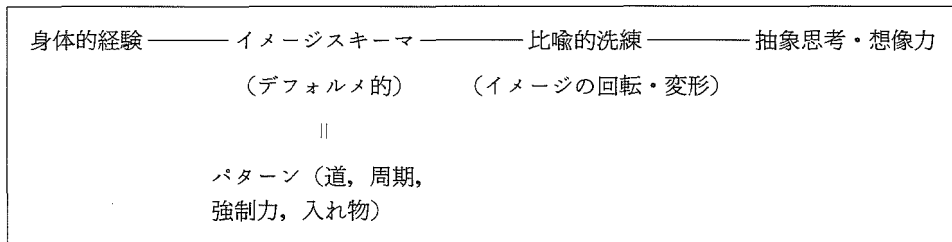


図 4

データ（付録5）を見ると、「服、値段」の出現回数はそれぞれ26.7回、23.3回で上位を占め、価格体系における MORE IS UP メタファーが既に強く定着した用法であることが見て取れる。

さて、少し話を戻すが、問2で基本形容詞のプロトタイプが具象名詞で構成されていることがわかった。たとえば「大きい手」「軽い石」である。が、しかし「大きい態度」「軽い性格」「長い人生」などのデータの存在も無視することができない。これらはメタフォリカルな用法であり、ここには身体的経験から創発するイメージ・スキーマ（図式）の投影を見ることができる。Johnson（1987）によると、下図のように身体的経験を通して形成されたイメージスキーマが我々の抽象概念・思考の基盤となり、我々は具象概念から生まれたイメージスキーマを抽象の領域にメタファー的に投影（metaphorical projection）して、抽象概念を操作しているという。



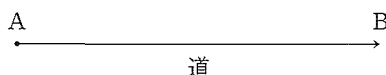
この点をもう少し具体的に見るために、少々長くなるが、道（PATHS）のイメージ図式に関する箇所を引用してみよう（Johnson 1987: 235）。

われわれの生活には空間的世界を結びつける道が溢れている。あなたのベッドから風呂場へ、オープンから台所の食卓へ、家から雑貨店へ、サンフランシスコからロサンゼルスへ、そして地球から月へと通じる道がある……これらのどの事例にも、一定の内的構造をもった単一のイメージ図式が繰り返し登場する。道のあらゆる事例において、以下のような同じ部分がつねに見られる。すなわち、(1) 起点、ないし出発点、(2) 目的地、あるいは到達点、(3) 起点と目的地を結びつける一連の隣接する場所である。したがって、道とはある点から別の点へと向かう運動経路である。これらの部分とその相互関係のゆえに、道を表すイメージ図式はある典型的性格をもつ。(a) ……A点から……B点へと向かう道にそって運動すると、二点間にあるあらゆる点を通過することになる。(b) 道には方向性を負わせることができる……人間が道を通るのには目的がある。それゆえ、道は方向をもつものとして経験される傾きにある。すなわち、われわれはA点からB点へ向かって動くのである。(c) 道は時間的次元を写像することができる。私はA点（起点）を時刻  $T_1$  に出発して時刻  $T_2$  にB点（目的地）に着く。このように、道は時間を線として写像することができる。したがって、B点がA点から道を下ったところにあり、私が道にそって動いてB点に達するなら、出発したときから時間が経過したことになる。時間をこのように線として空間化することが、時間性を理解する一つの重要なやり方をもたらす。道図式がもつこの明確な内的構造は、具体的・空間的な領域から抽象的



領域へとなされる数多くの隠喩的写像にたいして基礎を提供する。道図式が……目標とは物理的目的地である (PURPOSES ARE PHYSICAL GOALS) という隠喩を基礎づけている……目標とは物理的目的地であるという隠喩は、道図式と状態とは場所である (STATES ARE LOCATIONS) という隠喩に基づいている……目的地への具体的で物理的な到達がもつ構造が目標達成一般という抽象的領域へと写像されるが、この写像に基づいて、広範囲な言語表現を行なうことができるようになる。

そして、以下のような図 (PATH SCHEMA) とそれを示す用例を挙げている。



目標とは物理的目的地である。

Tom has gone a long way toward changing his personality.

You have reached the midpoint of your flight training.

I've got quite a way to go before I get my Ph. D.

She's just starting out to make her fortune.

Jane was sidetracked in her search for self-understanding.

Follow me—this is the path to genuine happiness.

You'll never achieve salvation unless you change your course.

先ほどの例では、「人生」という名詞概念と「長い」という形容詞概念を重ね合わせて「長い人生」という言い方をするが、ここには明らかに Johnson (1987) のこの「道」のイメージスキーマの隠喩的投射が行なわれていると解釈できよう。短い命も同様である。尼崎 (1988) は和歌の掛詞の一語二役のケースについて次のように述べている。

「奥山の深き心を」という時、「深き」は空間の深さと思いの深さと、二つの意味を担うわけである。このような現象がおこるのは、「深き」という語の厳密な意味は、コンテキストを与えられてはじめて確定されるからである。つまり「山」というコンテキストを与えられれば空間上の意味となり、「心」というコンテキストを与えられれば思いの深さを指すことになる。同様に「はやい」という語は水の流れというコンテキストを与えれば速度の速さを表し、恋を始めたというコンテキストを与えれば時期の早さを表す。こうして同じ言葉も前後にどのような言葉があるかによって、異なる意味相を露わにするのである。

これも Johnson (1987) に従えば、「深さ」や「はやさ」のイメージスキーマがあって、それをそれぞれのコンテキストに投影した例といえよう。

なお時間概念に関しては Clark (1973) も同様に、「Time can be viewed as a highway consisting of a succession of discrete events (時間は、別個の出来事の連続からなる高速道路として見られ得る) ...In English, time expressions are based directly on a spatial

metaphor (英語では、時間表現は空間的メタファーに直接基づく。)のように述べ、メタファーの重要性を指摘している。

さて、「大きい態度」「軽い性格」「長い人生」などは、連想力の強い組みあわせ(連語)であるという点も見逃せない。「大きい」「軽い」等が、それ独自の意味展開の中で、具象、抽象を問わずいろいろな名詞概念を取り上げるが、その過程において、ある抽象概念が、ある頻度で出現し、それが生活語の一部として使われる場合、その形容詞のプロトタイプ項目のひとつとなるという可能性がある。「大きい」「軽い」の形容詞概念が名詞を取り上げる時に、「態度」「性格」の世界が「大きい」「軽い」の形容詞概念で切り取られることになる。もともとは比喩的であった意味が慣用化の道をたどり、指示対象が一義的に決まることとなったというシナリオが考えられよう。

これらの例は特に対関係としてあらわれないことが多い(山梨1988)。たとえば「鼻」が「高い」「低い」は文字どおりの鼻の高さ/低さをあらわしたのから、「高い」の一方のみ比喩的に意味のずれが起きたものである。実際には、文字どおりの意味か比喩的意味かはコンテキストなくしては曖昧であるが、「高い鼻(鼻が高い)」は比喩的な意味がプラスされる。それを反映してか、データでは、「低い鼻」は9.5、「高い鼻」は21.7と頻度上の差がある。

他の例を見てみよう。上段が特に比喩(メタファー)的に使われることの多い項目で、対の表現と比べると出現回数が多くなっている。

軽い性格 12.7	細い目 27.6	長い目 14.5	弱い頭 23.7	狭い視野 20.0
重い性格 1.7	太い目 1.8	短い目 0	強い頭 7.7	広い視野 3.4

太い神経 23.6	低い腰 17.5	広い顔 16.9	広い額 15.3	広いおでこ 15.3
細い神経 8.6	高い腰 0	狭い顔 5.0	狭い額 5.0	狭いおでこ 0

大きい態度 11.5	重い空気 17.2	軽い頭 25.4	大きい頭 31.1	薄い頭 34.1
小さい態度 1.7	軽い空気 3.2	重い頭 10.3	小さい頭 5.1	濃い頭 未

重い足 19.0	(参)重い足取り 15.5
軽い足 6.3	軽い足取り 17.5

注:「細い目」は「目を細める」からか。「長い目」はここでは「長い目で見える」のデータも含んでいる。

数字は頻度をあらわす。「視野」に関しては「広い/狭い」どちらも言う。単位:回/100

では、なぜメタファーかという問題がある。メタファーでは、ある語や表現aとbが結びつけられる。そこでa(本義)とb(転義)が相互に作用しあい、その結果ABに共通の、ある特徴・要素が創出されることになる。別の言い方をすると、bというフィルターを通してaに照明があてられ、a bの共通要素が浮かび上がってくるのである。その他の部分は背景に沈むが、なくなってしまうわけではない。aのみ、bのみで使用される場合、及びc、dという別の項目と結びつくメタファーの場合には、背景に取り残された要素が顕在化されることにもなる(Lakoff & Johnson 1981)。ある項目(a, b...=語, 表現)は、言語という体系(網)の中で相対的な価値を付与されている(丸山1981)。体系に変化が生ずれば、

つまり網の目が変われば、世界の区切り方も変わり、項目間の相対的価値もそれに応じて変わる。網の目を細かくすれば、それだけ場面に適切な表現が生まれ、誤解を生まず、こちらの真意が相手によく伝わるということもある。が、そうすると経済的に非常に効率が悪い。そこで、既存の項目という万人に周知の形にメタファーという手段を用いて、新たな意味付けを行なうのである。メタファーの働きには、ある項目の一部の要素やパターンを強調することによって、意味の世界を広げるという経済的側面もあるかもしれない。佐藤（1977）は、「私たちは<無限の事態を有限の言語によって取り扱わざるをえない>のである。そしてそれは実は<無理な算段>であるかもしれないのだ」とし、語彙（=分類項目）の有限性を解決する工夫として、レトリックの発生をみた説明する。

この他にメタファーの働きとしては、少なくとも次の三つのことが考えられる。まず最初に、たとえば、項目aはAというカテゴリーに属し、bはBというカテゴリーに属す場合、メタファーによって、一時的にせよ、そこでカテゴリーの再編が行なわれる。そういったカテゴリー間の「overleap（飛び越え）」によって、送り手は言いたいことを正確に表そうとし、聞き手は、それに加え、意外性を楽しみ、かつまた既存の見方を変化させてゆくということである。尼崎（1988）はカテゴリーを百科辞典的、非百科辞典的なものに分け、後者を人間の主観的な知識、印象、体験によって成り立つものとし、和歌を例に取り、次のように述べている。

和歌における見立ては、事象を百科辞典的に分類するのではなく、美的意味に従って分類し、その分類によって世界を見直すことを読者に求めるのである。物の見方の変更とは、カテゴリーの切り直しに他ならないが、それはこの場合カテゴリーの作成基準を日常のものから美的なものへ切り替えることなのである。そしてこのカテゴリーの切り直しによって生ずる意味は、百科辞典的知識の一部として巻き込まれるようなものではなく、ただ読者がその態度を維持している間だけ持続する、美的意味（「もののあはれ」）なのである。

二つ目の働きとしては、全く別の存在である個人と個人の間の生き生きとした円滑なコミュニケーションを計るのに万人に共通の経験・感覚を拠り所にするということがある。また、これに関連して、相手を納得させる手段としてもメタファーは使われることがある。「あいつは狼だ」のメタファーを聞いて、「あいつ」という人間が（コンテキスト内で）鮮やかに浮かび上がってくる。それがコミュニケーションを円滑に保つのに一役買っているのだが、その際に、尼崎（1988）は、「狼」から「呼び起こされた印象」に対する私たちの身構えや態度が、「あいつ」に転用され、「あいつ」についての私たちの見方を変えるのだとしている。

三つ目としては、頭を働かせる余地を残し、コミュニケーションの機微を楽しむということがある。佐藤（1977）は、聴き手を「目ざめさせるための<驚き>と、ふたたび眠らせないための<遊び>」という二つの要素がレトリックに伴う緊張（記号的緊張）を構成すると述べている。

さて、問1で「らしさ」という問題が出た。ある対象について「らしさ」を決めるのは個人であり、個人の目を通して対象の特徴抽出を行なう。その場合、個人間で共通性が見られ

るものと個人に固有なものが考えられる。個人間で共通性があるもの場合は、その要素が対象にとって特徴的とみなされ、だれから見ても可視性が高く、そういった要素は対象に典型的なものとしてプロトタイプを形成する (typical member 典型的成員)。例えば「大きい象」「巨大なマンモス」「太い大根」「太い丸太」「短い休み」などが例として考えられ、「象」と言えば、万人が大きいと答える」式のパターンがみられる。反対に、個人的な経験で、多くは一過性のもものでは「大きいみかん」など、その項目対象内で比較されたものがある。しかし、このようなプロトタイプの知覚的側面に加え、その他の要因も考慮しなければならないだろう。たとえば、社会的要因が挙げられる。個人的な経験が、やがて社会の傾向、流行にまでなると、それがプロトタイプとなる可能性も出てくる (social stereotype 社会的ステレオタイプ)。データを例にとると、たとえば「テレビ」はそれ自体では「大きい」のプロトタイプ項目ではないが、最近のテレビ画面の拡大化の社会傾向に伴い、「大きいテレビ」という連想が引き出されるのだと思われる。また、「小さい秋」の連想を、かなり多くの学生が挙げたが、これはどう考えればよいだろうか。「秋」と「小さい」の結びつきは決して知覚的なものではない。しかし、童謡の文句を敏感に取りあげた結果と考えられる。「小さい秋」の連想が直接プロトタイプの構成に影響を与えるということは疑わしいが、「社会的ステレオタイプ」を重要変数として考慮していくことは必要であろう。「小さい秋」は歌の文句であり、童謡の社会性ということから、社会的ステレオタイプの例として取りあげたが、同時に「慣用表現」という枠内で捉えることもできる。データを見てみると、慣用的な決まり文句が下記のように多数出現した。

例：「厚い胸板」「厚い肉」「厚い皮」「重い空気」「太い野郎」「太い腹」「長い目」  
「狭い了見」「大きい態度」「薄い人情／情け」「広い顔」「低い腰」「強い腕」  
「重い足取り」「高い鼻」「太い神経」「細い目」

注：これらはもちろん個人の経験にも含まれ得る事柄であり（「重い空気」など）、分類が困難なものもある。上記は、「腰が低い（態度がへりくだった）」「肉厚」「（面の）皮が厚い」「重苦しい空気が流れる」「腕っぷしが強い」「鼻が高い、鼻高々」「神経が太い、図太い」「目を細める」「長い目で見ると」などの影響を受けたと考えられる。

プロトタイプに関しては、人の目を通してそう見えることだけでなく、そうあって欲しいという期待値も含まれるようである (ideal member 理想的成員)。「心」は「小さい」よりも「大きい」方がよく、「精神」は「強く」、「体」は「細い」方が良いなどがデータにみられる。

大きい心 26.2	強い精神 21.5	細い体 44.8
小さい心 10.2	弱い精神 2.6	太い体 16.4

注：数字は頻度をあらわす  
単位：回/100

さらに「人」に関する例を見ると、「強い」「高い」「重い」などの「良い」価値をもった形容詞概念と結びつくことの方が多いたことがわかる。

強い人 49.2	高い人 15.0	重い人 32.8	大きい人 31.1
弱い人 31.6	低い人 7.9	軽い人 19.0	小さい人 28.8

注：数字は頻度をあらわす  
単位：回/100

鉛筆はその形状が細長いものであるが、長さが規格で決まっており、もとの長さ (cognitive reference point) から比べると、使用中の鉛筆は「短い」となる (salient member 目立つ成員)。

長い鉛筆 27.0 短い鉛筆 47.3

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100

さて、プロトタイプの形成過程に関して、これらの分析結果から何が言えるであろうか。本稿では、プロトタイプを「らしさ」の基準として位置づけた。「らしさ」を見い出すのに働いている要因として「典型性」「社会的通念」「理想性(願望)」「知覚的顕著さ」を挙げた。これらの要因は、Lakoff (1987) でも議論されているが、ここで大事なのは、「プロトタイプ=典型性」という狭義の見方の修正が要請されるという点であろう。ここではデータに顕著な要因だけを取りあげたが、要因はこれ以外にもあろう。上でもふれたが、「決まり文句」は言語の慣用化された側面であり、「語から連想するものをあげよ」形式の調査では、意識に昇りやすい。では、慣用表現もプロトタイプ概念の形成要因になり得るといえるであろうか。これは今後の課題であるが、プロトタイプの性質を解明していく際に解決しておかなければならない問題であろう。さらに言えば、発達の観点を導入した場合、上で挙げた要因はどのような形(どのような順番と組み合わせ)でプロトタイプ形成に作用するのであろうか。これもプロトタイプ研究の残された課題である。

## ま と め

以上、基本形容詞のプロトタイプ構造を、データに照らし合わせながら見てきたわけであるが、以下のことが一応明らかになった。

1. 大きい／小さい、長い／短いのような基本形容詞は対構造をもつが、実際の運用にあたっては、常にきれいな対関係が見られるとは言えず、項目間で結びつきに強弱が見られた。
2. 基本形容詞の概念形成の核になるのは、身体部位を中心にした名詞概念、さらにそれを取り巻く環境物からなる basic level 語であり、概念形成における身体的経験の重要性が示唆された。
3. 抽象概念の操作は、具象概念から生まれたイメージスキーマを抽象の領域にメタファー的に投影することによって行なわれている。
4. プロトタイプ概念形成の要因として「典型的成員」「社会的ステレオタイプ」「理想的成員」「目立つ成員」そして「慣用表現」の5つを挙げた。

なお今後の課題としては特に(2)(3)(4)が重要であるが、発達の段階をふまえた概念形成の研究調査を行なう必要があるだろう。

## 参 考 文 献

- 尼崎 彬 1988. 「日本のレトリック」筑摩書房。  
 尼崎 彬 1990. 「ことばと身体」頸草書房。  
 Clark, H. H. 1973. Space, time, semantics, and the child. In T. E. Moore (ed.), *Cognitive development and the acquisition of language*. New York: Academic Press.

- 市川 浩 1984. 「身の構造：身体論を越えて」青土社.
- Johnson, M. 1987. *The body in the mind*. Chicago: University of Chicago Press.  
[M.ジョンソン, 「心のなかの身体」, 菅野盾樹他訳, 紀伊國屋書店, 1991年]
- 国広哲弥 1982. 「意味論の方法」大修館書店.
- Labov, W. 1973. The boundaries of words and their meanings. In C. J. N. Bailey and R. W. Shuy (eds.), *New ways of analyzing variation in English*. Washington, DC: Georgetown University Press.
- Lakoff, G. 1987. *Women, fire and dangerous things: what categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lakoff, G. and Johnson, M. 1980. *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.
- 丸山圭三朗 1981. 「ソシュールの思想」岩波書店.
- 守屋慶子 1982. 「心, からだ, ことば」ミネルヴァ書房.
- Pulman, S. G. 1983. *Word meaning and belief*. London: Croom Helm.
- Rosch, E. 1973. On the internal structure of perceptual and semantic categories. In T. E. Moore (ed.), *Cognitive development and the acquisition of language*. New York: Academic Press.
- Rosch, E. 1978. Principles of categorization. In E. Rosch and B. Lloyd (eds.), *Cognition and categorization*. Hillsdale, NJ: LEA.
- 佐藤信夫 1977. 「記号人間」大修館書店.
- 田中茂範 1992. 「認知意味論的探求(1): 一般化・典型化・差異化」SFC Journal of Language and Communication (1).
- 山梨正明 1988. 「比喩と理解」(認知科学選書17) 東京大学出版会.

## 付 録

以下は、名詞項目の頻度（出現回数が10回以上のもの）を形容詞項目別にまとめたものである。該当の形容詞に関しては、名詞項目の頻度の高いものから並べてある。

1 大きい：A足 B手 C目 D口 E顔 F体 G家 H人 I頭 J鼻 K車 L山 M心 N机 O服 P木 Q川 R海 S椅子 T犬 U耳 V声  
W靴 X猫 Yけしごむ Z建物 a町 b鞆 cビル dテレビ e態度

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	a	b	c	d	e		
1 大きい	60.7	57.4	44.3	39.3	37.7	36.1	34.4	31.1	31.1	29.5	27.9	27.9	26.2	24.6	23.0	23.0	21.3	19.7	19.7	19.7	18.0	16.4	14.8	14.8	14.8	14.8	11.5	11.5	11.5	11.5	11.5		
2 小さい	52.5	55.9	44.1	25.4	18.6	27.1	25.4	28.8		25.4	15.3	10.2	10.2	25.4	20.3	11.9		18.6	23.7	16.9	15.3	18.6	22.0	27.1			11.9						
3 長い	74.2	51.6	12.9	16.1						14.5							27.4																
4 短い	87.3	54.5														14.5	16.4																
5 高い							10.0	15.0		21.7	15.0	58.3		11.7	26.7	50.0		11.7				11.7							56.7				
6 低い												58.7		31.7		34.9		33.3				17.5			14.3			15.9					
7 太い	81.8	25.5			16.4		20.0								52.7																		
8 細い	70.7	24.1	27.6		12.1	44.8		12.1							34.5	27.6																	
9 広い					16.9		28.8						66.1	13.6		10.2	67.8										10.2						
10 狭い							30.0						52.5			12.5																	
11 重い	19.0				20.7		32.8	10.3		19.0		13.8	31.0					20.7				13.8					22.4		13.8				
12 軽い							19.0	25.4		22.2			28.6	17.5				22.2				25.4					15.9						
13 厚い														13.2																			
14 薄い								34.1						17.1																			
15 強い	15.4				20.0		49.2					36.9							10.8														
16 弱い					44.7		31.6	23.7				42.1																					

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100

2 小さい：A手 B足 C目 D子供 E人 F体 Gけしごむ H口 I鼻 J机 K家 L犬 M猫 N服 O靴 P顔 Q鉛筆 R椅子 S花 T耳 U車 V声 W秋 X部屋 Y虫 Z木 a鞆 b手袋 c指 d心 e鳥 f山 g本 h蟻

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	X	Y	Z	a	b	c	d	e	f	g	h	
1 大きい	57.4	60.7	44.3		31.1	36.1	14.8	39.3	29.5	24.6	34.4	19.7	14.8	23.0	14.8	37.7		19.7		18.0	27.9	16.4				23.0	11.5			26.2	27.9				
2 小さい	55.9	52.5	44.1	44.1	28.8	27.1	27.1	25.4	25.4	25.4	25.4	23.7	22.0	20.3	18.6	18.6	18.6	18.6	16.9	16.9	15.3	15.3	15.3	13.6	11.9	11.9	11.9	10.2	10.2	10.2	10.2	10.2	10.2	10.2	
3 長い	51.6	74.2	12.9						14.5							16.1	27.4																		35.5
4 短い	54.5	87.3															52.7										14.5							43.6	
5 高い					15.0				21.7	11.7	10.0			26.7	11.7			11.7			15.0						50.0							58.3	
6 低い										31.7								33.3				17.5				34.9								58.7	
7 太い	25.5	81.8			20.0	16.4											36.4										52.7							50.9	
8 細い	24.1	70.7	27.6		12.1	44.8										12.1	34.5										34.5							50.0	
9 広い											13.6	28.8					16.9								64.4									66.1	
10 狭い												30.0																						52.5	
11 重い		19.0			32.8	20.7				31.0					13.8			20.7			19.0							22.4			13.8			12.1	
12 軽い					19.0					28.6					17.5	25.4		12.7	22.2			22.2						15.9						25.4	
13 厚い															13.2																			73.6	
14 薄い															17.1																			24.4	
15 強い		15.4			49.2	20.0							10.8																					36.9	
16 弱い				15.8	31.6	44.7																													42.1

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100

3 長い：A足 B手 C時間 D髪 E道 Fひも G指 H川 I夜 J鉛筆 K首 L人生 M棒 N顔 O橋 P鼻 Q目 R線路

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R
1 大きい	60.7	57.4						21.3							37.7	29.5	44.3	
2 小さい	52.5	55.9					10.2			18.6				18.6	25.4	44.1		
3 長い	74.2	51.6	46.8	38.7	38.7	38.7	35.5	27.4	27.4	27.4	25.8	22.6	19.4	16.1	16.1	14.5	12.9	11.3
4 短い	87.3	54.5	34.5	38.2		23.6	43.6	16.4		52.7	23.6		32.7					
5 高い																21.7		
6 低い																		
7 太い	81.8	25.5				10.9	50.9			36.4	27.3		43.6					



8 細い	70.7	24.1		25.9	53.4	24.1	50.0	27.6		34.5	13.8		17.2	12.1			27.6
9 広い				13.6			10.2							16.9			
10 狭い				57.5			12.5							10.0			
11 重い	19.0																
12 軽い										12.7							
13 厚い																	
14 薄い				34.1													
15 強い	15.4																
16 弱い																	

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100

4 短い：A足 B手 C鉛筆 D指 E髪 F時間 G棒 H首 Iひも J距離 K毛 L川 M爪 N命 O木 P糸 Q期間 R腕 Sペン

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S
1 大きい	60.7	57.4										21.3			23.0				
2 小さい	52.5	55.9	18.6	10.2											11.9				
3 長い	74.2	51.6	27.4	35.5	38.7	46.8	19.4	25.8	38.7			27.4							
4 短い	87.3	54.5	52.7	43.6	38.2	34.5	32.7	23.6	23.6	23.6	18.2	16.4	16.4	14.5	14.5	12.7	12.7	10.9	10.9
5 高い															50.0				
6 低い															34.9				
7 太い	81.8	25.5	36.4	50.9			43.6	27.3	10.9						52.7	12.7		34.5	16.4
8 細い	70.7	24.1	34.5	50.0	25.9		17.2	13.8	24.1			27.6			34.5	36.2		39.7	12.1
9 広い												10.2							
10 狭い												12.5							
11 重い	19.0																		
12 軽い			12.7																
13 厚い																			
14 薄い					34.1														
15 強い	15.4																	12.3	
16 弱い																			

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100



9 広い				13.6		47.5													
10 狭い																			
11 重い				20.7	31.0														
12 軽い				22.2	28.6														
13 厚い																			
14 薄い																			
15 強い																			
16 弱い															10.5				

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100

7 太い：A足 B木 C指 D棒 E鉛筆 F腕 G首 H手 I神経 J人 K柱 L大根 Mペン N体 O糸 P丸太 Q枝 Rひも S眉毛

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S
1 大きい	60.7	23.0						57.4		31.1					36.1				
2 小さい	52.5	11.9	10.2		18.6			55.9		28.8				27.1					
3 長い	74.2		35.5	19.4	27.4		25.8	51.6										38.7	
4 短い	87.3	14.5	43.6	32.7	52.7	10.9	23.6	54.5				10.9		12.7				23.6	
5 高い		50.0								15.0									
6 低い		34.9																	
7 太い	81.8	52.7	50.9	43.6	36.4	34.5	27.3	25.5	23.6	20.0	20.0	18.2	16.4	16.4	12.7	10.9	10.9	10.9	10.9
8 細い	70.7	34.5	50.0	17.2	34.5	39.7	13.8	24.1		12.1			12.1	44.8	36.2			24.1	
9 広い																			
10 狭い																			
11 重い	19.0									32.8				20.7					
12 軽い					12.7					19.0									
13 厚い																			
14 薄い																			
15 強い	15.4					12.3				49.2				20.0					
16 弱い										31.6				44.7					

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100







7 太い											20.0							36.4			16.4		
8 細い											12.1								34.5			44.8	
9 広い		13.6																					
10 狭い																							
11 重い	48.3	31.0	39.7	32.8	10.3	12.1	13.8	20.7	19.0	32.8		17.2	17.2	15.5	22.4							20.7	
12 軽い	44.4	28.6	28.6	27.0	25.4	25.4	25.4	22.2	22.2	19.0	17.5	17.5	17.5	15.9	15.9	12.7	12.7	11.1	11.1	11.1	11.1	11.1	
13 厚い							73.6					13.2											
14 薄い					34.1	24.4						17.1											
15 強い											49.2											20.0	
16 弱い					23.7						31.6											44.7	

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100

13 厚い：A本 B壁 C板 D唇 E辞書 F紙 G胸板 H皮 Iノート J鉄板 K服 Lパン M布 N肉

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N
1 大きい											23.0			
2 小さい											20.3			
3 長い														
4 短い														
5 高い											26.7			
6 低い														
7 太い														
8 細い														
9 広い														
10 狭い														
11 重い	12.1													
12 軽い	25.4										17.5			
13 厚い	73.6	41.5	37.7	28.3	24.5	20.8	20.8	17.0	17.0	15.1	13.2	13.2	11.3	11.3
14 薄い	24.4	14.6	29.3			68.3					17.1		24.4	
15 強い														
16 弱い														

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100

14 薄い：A紙 B色 C髪 D頭 E板 F布 G本 H氷 I服 J壁 Kガラス L味

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L
1大きい				31.1					23.0			
2小さい									20.3			
3長い			38.7									
4短い			38.2									
4高い									26.7			
6低い												
7太い												
8細い			25.9									
9広い												
10狭い												
11重い				10.3								
12軽い				25.4					17.5			
13厚い	20.8				37.7	11.3			13.2	41.5		
14薄い	68.3	53.7	34.1	34.1	29.3	24.4	24.4	22.0	17.1	14.6	14.6	14.6
15強い												
16弱い				23.7								

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100

15 強い：A力 B人 C心 D意志 E男 F精神 G体 H女 I足 Jチーム K風 L腕 M犬

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M
1大きい		31.1	26.2				36.1		60.7				19.7
2小さい		28.8	10.2				27.1		52.5				23.7
3長い									74.2				
4短い									87.3			10.9	
5高い		15.0											
6低い													
7太い		20.0					16.4		81.8			34.5	
8細い		12.1					44.8		70.7			39.7	



9 広い			66.1												
10 狭い			52.5												
11 重い		32.8	13.8				20.7		19.0						
12 軽い		19.0													
13 厚い															
14 薄い															
15 強い	60.0	49.2	36.9	30.8	26.2	21.5	20.0	18.5	15.4	13.8	13.8	12.3	10.8		
16 弱い	21.1	31.6	42.1	18.4			44.7			15.8	10.5				

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100

16 弱い：A体 B心 C人 D頭 E人間 F力 G意志 H阪神 I子供 J動物 K虫 Lチーム M光 N風 O腰 P巨人 Q骨 Rロッチェ S立場

	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	
1 大きい	36.1	26.2	31.1	31.1																
2 小さい	27.1	10.2	28.8						44.1	11.9										
3 長い																				
4 短い																				
5 高い			15.0																	
6 低い														17.5						
7 太い	16.4		20.0																	
8 細い	44.8		12.1																	
9 広い		66.1																		
10 狭い		52.5																		
11 重い	20.7	13.8	32.8	10.3																
12 軽い			19.0	25.4																
13 厚い																				
14 薄い				34.1																
15 強い	20.0	36.9	49.2			60.0	30.8						13.8	13.8						
16 弱い	44.7	42.1	31.6	23.7	23.7	21.1	18.4	18.4	15.8	15.8	15.8	15.8	13.2	10.5	10.5	10.5	10.5	10.5	10.5	10.5

注：数字は頻度をあらわす。単位：回/100